

フランスの大西洋貿易と地中海側ラングドック

—産業の発展と穀物流通—

空 由佳子

はじめに

一七八七年、フランス周遊の旅を行っていたアーサー・ヤングは、南フランスのラングドックの主都トゥールーズに向かう途中、田園地帯に見事な麦畑が広がる様相をその手記に残している。⁽¹⁾フランスの大西洋貿易が盛んになった時期に、ラングドックは豊かな穀倉地帯を形成し、そこからの穀物流通に支えられて、ポルドーとマルセイユは世界的な貿易港に成長したのである。⁽²⁾本稿はフランスの大西洋貿易と地中海側の後背地ラングドックの変容について考察する。

一七・一八世紀にフランスは北アメリカとカリブ海を中心とする「植民地帝国」を築き、イギリスと覇を競う列強に成長した。⁽³⁾その大西洋進出を担った海港都市は大きく発展するが、繁栄の影で貧富の格差は拡大し、不作は食糧危機を何度も引き起こしていた。このような状況のなかで、食糧問題が統治上の主要な課題として浮上する。そこで争点となったのが、穀物の生産・交易と食糧供給のあり

方であった。ヨーロッパとアメリカ植民地とを軸とする世界商業と国際分業が次第に成立するなかで、いかにして食糧の安定供給を確保しつつ経済を発展させるのか、という問題にフランスは直面するようになったのである。

一五世紀末から進展する世界経済は、ブローデルやウォーラス・テインにより、中心をなす北西ヨーロッパと従属する周辺の関係に基づくシステムとして捉えられてきた。⁽⁴⁾この支配・従属関係のシェームに限界があることは、フランス国際商業史を牽引してきたポール・ビュテルや深沢克己によってすでに指摘されている。例えば、大西洋貿易によるポルドーの成長は、熱帯産品を生産するアメリカ植民地と、植民地のプランターの生活必需品の供給地にして熱帯産品の販路である内陸の後背地との相互依存関係に支えられていた。⁽⁵⁾

その一方で、近世の国際商業に関する研究は、海港都市と貿易商人の活動に集中しており、世界商業が内陸に与えた影響にまで十分な関心が向けられていたとは言い難い。⁽⁶⁾また、地中海地域では一六

世紀後半に復興した香辛料貿易がオランダによるインド洋掌握を契機に衰退の道を辿ると言われているが、⁽⁷⁾深沢によるマルセイユのレヴァント貿易史研究は、近世の地中海貿易を度外視すべきではないことを示唆している。

以上のことを踏まえ、本稿では大西洋貿易の全盛期におけるフランス社会経済の変容を、地中海側ラングドックの産業と穀物流通を事例として捉えなおすことを目的とする。ここでは比較史の方法をとり、三つの商業圏（ラングドックの港と後背地、地中海の港マルセイユとレヴァント地方、大西洋の港ポルトとアメリカ植民地）の相互関係に注目しながら、大西洋貿易は内陸の経済活動や食糧事情にいかなる影響を与えたのか、また貿易商人と統治権力は食糧を確保するために穀物流通にどのように関わったのかを検討する。

従来の研究では、穀物供給の問題はブルジョワと民衆の利害の対立というマルクス主義の視点から捉えられがちであった。⁽⁹⁾しかし、地域の支配層にあたるブルジョワにとって、商業上の利益だけではなく、地域経済の活性化や住民への食糧供給も、地域の発展や秩序維持のために重要だったのではないだろうか。こうした観点から、穀物流通における貿易商人の位置づけも再検討する必要がある。なお、ラングドック経済に関しては、ル・ロワ・ラデュリが農村について、⁽¹⁰⁾フレッシュュがトゥールーズ地域について、⁽¹¹⁾ラルギエがナルボンヌ地域について研究を行い、すでに豊かな知識が得られているが、食糧供給についての研究はまだ十分に進んでいない。

本稿の主要な分析対象となるランドックはアンシャン・レジーム下の州のひとつであり、地方三部会による自律的な統治が存続する

一方で、モンプリエには地方長官府も置かれていた。このフランス南部の広大な地方は自然環境の異なる諸地域から構成され、内陸のオ・ラングドックと地中海側およびローヌ川以西のバ・ラングドックに大きく分けられる。地方三部会の議長を務めるナルボンヌ大司教の強大な権威のもとに置かれ、宗教人口はカトリックが多数派であったが、ただローヌ川以西の山岳地帯セヴェンヌにはプロテスタントが少なくなかった。以下の調査のため、ナルボンヌ市参事会議事録、オード県およびエロー県古文書館の文書群Cに収められている地域経済に関する覚書、穀物取引に関する法令、往復書簡、市場調査、輸出記録を史料として用いる。

第一章 ふたつの海とラングドックの港

一五世紀末から活発化する探検航海と世界商業の展開により、海上商業の中心は地中海から大西洋に移った。⁽¹³⁾その一方で、地中海世界でも伝統的な交易圏における活動が続けられた。地中海側に位置するラングドックの港は、大西洋貿易の波を受けつつ、その活動をどのように変容させていったのであろうか。

中世のフランスでは、王国の地中海側出口としてラングドックの港が海上商業を担った。なかでも最も繁栄を謳歌したのがナルボンヌである。古代ローマ都市を起源とし、陸（ドミティア街道とアキテーヌ街道）・川（オード川とガロンヌ川）・海の道の十字路をなすナルボンヌは、北イタリア、カタルーニャ、ビザンツ帝国と貿易協定を結び、プロヴァンス伯領のマルセイユと密接に連携して沿岸航海を行うことで、交易活動の範囲を地中海全域に広げた。さらに、

内陸の陸路と水路で大西洋の港ポルドーともつながり、地中海と大西洋が結ばれていた。⁽¹⁵⁾ このナルボンヌと一時は競合した港エグモルトは、一四八一年にプロヴァンス伯領の王国への併合に伴ってマルセイユとローヌ川沿いのアルル、ボケール、リヨンを軸とする地域に新たな交易中心地が形成されたこと⁽¹⁷⁾、衰退の道を辿った。ナルボンヌに関しては、マルセイユとの連携を強め、プロヴァンス州に新たな市場を獲得することで、むしろ発展を遂げていく。⁽¹⁸⁾

すなわち、海上商業におけるラングドックの港の位置づけが変化するの、マルセイユによるレヴァント貿易の掌握と大西洋貿易の発展によるのである。

地中海の海上商業は一四五三年のビザンツ帝国滅亡とイスラム支配の拡大により一時的に停滞し、そのため大西洋に向けた探検航海が促された。しかし、一六世紀後半にはレヴァント経由の香辛料貿易が活気を取り戻している。また、一五六九年にフランスとオスマン帝国の間で締結された「居留特許条約」でイスラム地域との交易が再び可能になると、マルセイユはレヴァント貿易で繁栄し始め、一六六九年の王令によって自由港に指定され、レヴァント地方との貿易を独占するに至った。⁽¹⁹⁾

マルセイユは大西洋にも進出し、飛躍的な発展を遂げる。フランスは一七世紀に重商主義政策のもとで北アメリカとアンティル諸島の植民地化を進め、その延長線上でヨーロッパ、アフリカ、アメリカを結ぶ大西洋の三角貿易と、植民地産品を再輸出する中継貿易を構築した。マルセイユはすでにスペインのカディスを介してスペイン領アメリカ植民地との貿易に参入していたが、一六七四年に西イ

ンド会社（一六六四—一六七四）が解散すると、アンティル諸島へも進出し始めた。⁽²¹⁾ その後、一七一七年四月の開封勅書によってアンティル諸島との貿易が一三港に限定されたとき、地中海の港としてはラングドックのセットのみ選ばれていたが、一七一九年二月の開封勅書ではマルセイユも加えられた。これを契機として、マルセイユはレヴァント市場と大西洋市場を結びつけることとなり、一八世紀末にはフランス第二の貿易港へと急成長を遂げる。⁽²³⁾ その活動の中心は、葡萄酒、オリブ油、石鹼、蠟燭、繊維製品などの地中海産品とレヴァント産品をアメリカ植民地に供給し、砂糖、コーヒー、インディゴなどの熱帯産品を持ち帰って、地中海各地やレヴァント地方に再輸出することにあつた。⁽²⁴⁾ マルセイユがレヴァント市場を掌握し、ラングドック産毛織物の取引を独占すると、ラングドックの商人はこれに対抗しようとした。⁽²⁵⁾ しかし、マルセイユの優位が揺るぐことはなく、ラングドックの港はマルセイユへの従属を強め、内陸は後背地となってその活動を支えていく。

一方で、大西洋貿易の発展に伴って、ラングドックの港にとつては大西洋寄りに位置するポルドーとの関係がより重要性を増す。ポルドーは中世から、イングランドやネーデルラントとの間で、葡萄酒と毛織物などを交換する南北ヨーロッパ貿易を担ってきたが、一七世紀後半になると、葡萄酒貿易の発展と並行して大西洋にも進出し始め、一七一七年にはアンティル諸島との貿易港に指定されている。こうして一八世紀末までに、アメリカ植民地との貿易と、熱帯産品を北ヨーロッパに再輸出する中継貿易を担うフランス第一の港へと急成長を遂げる。⁽²⁷⁾ こうしたポルドーの活動を支えたのは、内陸

の豊かな後背地アキテーヌ（ギューエンヌ・ガスコーニュ州）とラングドックであった。ポルドーの商人はアンティール諸島に繊維製品、葡萄酒、穀物、塩漬け肉、果実を供給し、帰り荷として熱帯産品を持ち帰り、それを内陸の後背地に流通させるか、または北ヨーロッパに再輸出した⁽²⁸⁾。ポルドーが大西洋貿易に進出すると、ラングドックは輸出品の供給地として、またアメリカ植民地産品の販路として、大西洋市場に関わるに至ったのである。

このように大西洋側との交易が活発化すると、新たな交易路が整備された。ラングドックでは一七世紀から貿易量の増加に対応するために陸路と水路の建設が進むが、そのうち最も重要であったのが、一六八一年に開通した「大西洋と地中海を接続する王立運河」（ミデイ運河）である。それまで地中海から大西洋に出るにはスペイン支配下のジブラルタル海峡を通らねばならず、関税のコストや海賊遭遇の危険を回避するために内陸の交通路への要請が高まっていた。しかし、ポルドーからトゥールーズまではガロンヌ川が流れていたものの、トゥールーズから地中海までの水路は断続的であったため、運河が必要となり、この王立運河の地中海側出口にはセツトが選ばれ、一六六六年に新港が建設された。その結果、ラングドック商業の中心はナルボンヌからミデイ運河沿いの港、セツトとアグドに移動した。それ以降、地中海まで最短の距離にあるアグドが、ラングドックやプロヴァンスの産品をポルドーに提供し、またポルドーから熱帯産品を受け取って両地域に流通させて繁栄するようになる⁽³⁰⁾。他方、ミデイ運河の出口に選ばれなかったナルボンヌは、一七八七年のジョンクシオン運河建設でミデイ運河につながるまで不利な条

件に置かれる⁽³¹⁾。

かつて地中海貿易の主要な担い手であったラングドックの港は、大西洋貿易の発展とマルセイユ、ポルドーの台頭によって海上商業における中心的な役割を失うが、ふたつの海との関わりのなかで輸出品の供給という新たな使命を見出していった。こうした港の活動の変容は、内陸の後背地における経済の再編成を伴った。

第二章 ラングドック経済の再編成

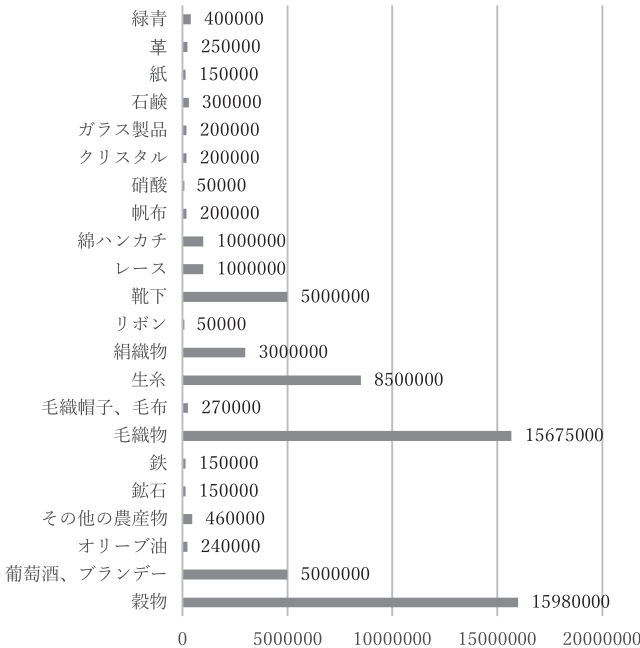
(一) 一八世紀のラングドック産品

一八世紀に世界商業を担ったマルセイユとポルドーの活動を支えたのは、後背地のラングドックとアキテーヌの豊かさであった。ラングドック経済はこれらの港と関わることでいかに再編成されたのか、一八世紀に地方長官区で作成された覚書を主な手がかりに検討する。

世界的な貿易港への輸出品の供給地となるラングドックの経済の特徴を把握するには、一七六八年のラングドック産品の売上総利益がひとつの指標となる（図一）。これを見るとラングドック産品の多様性に気づかされるが、なかでも繊維製品と穀物が最も大きな利益を生んでいたことがわかる。

まず繊維製品について述べれば、毛織物の利益が一五六万リブルにのぼり、これに毛織帽子と毛布の利益一七万リブルを加えると、羊毛製品が全体の二七％を占める。絹製品は生糸と絹織物の利益は合わせて一一五〇万リブルであり、これに靴下、レース、リボンといった絹小物の利益六〇五万リブルを加えると、絹製品

図1 1768年ラングドック産品の売上総利益（単位：リーブル）



出典：AD Hérault, C 2949, Mémoire en 1768.

の比率は羊毛製品より多い三〇％である。農産物については、穀物の利益が一五九八万リーブルに達し、その割合は全体の二七％と羊毛製品に匹敵する。葡萄酒やブランデーも五〇〇万リーブルの利益をもたらしているが、全体の九％を占めるに過ぎない。かつて主要輸出品であった青色染料のパステルは五万リーブルの利益しか生んでおらず、その衰退が確認できる。

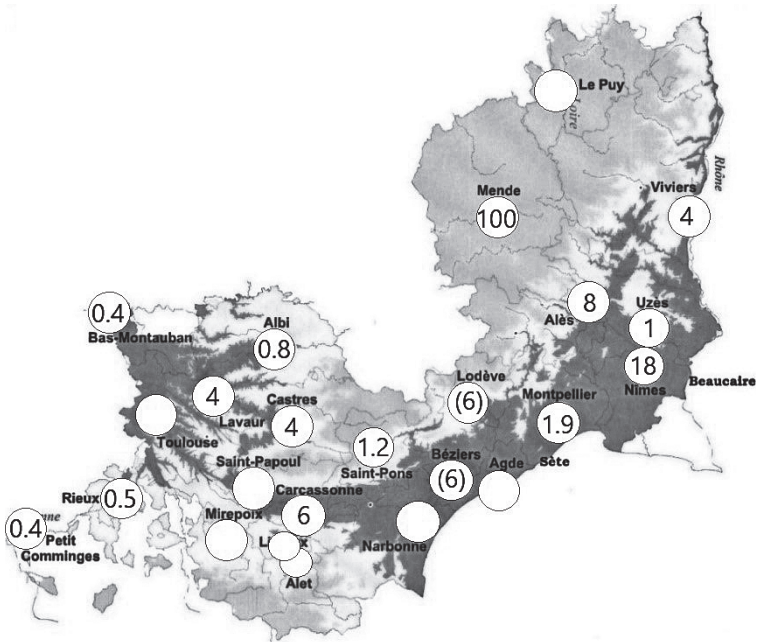
このように、ラングドックでは繊維産業と農業が基幹産業として繁栄しており、地域経済の成長は輸出用の手工業品や商品作物の生産増加に基づいていた。以下では、これらの産業がどのように発展したのか検討する。

(二) 繊維産業の発展

ラングドックは中世から毛織物の産地だったが、繊維産業が著しく発展し始めるのはフランスの海外進出が本格化する十七世紀後半からである。その要因のひとつとして、重商主義政策が挙げられる。世界商業が展開するなか、財務総監コルベールは国際市場で競争力のある輸出産業の保護・育成をはかり、ラングドックにも王立マニユファクチュアを建設している。しかし、より重要だったのは民間の力であり、地元の手工業者の主導で地場産業が活発化していく。⁽³²⁾

まず、伝統産業の毛織物が復興する。ラングドックでは中世から地中海側の山岳地帯で羊の放牧が盛んで、毛織物の一大産地であった。一六世紀には一時停滞したが、⁽³³⁾一七世紀後半になると王権の保護を受けて再び繁栄し始める。コルベールは重商主義の立場から、レヴァント貿易を強化しようと、ラングドックの毛織物の復興に尽力した。一六六六年にカルカソンのサプト王立マニユファクチュア、一六七七年にクレルモンのヴィルヌヴェット王立マニユファクチュアを設置し、オランダとイギリスから呼び寄せた職人から技術を学び、⁽³⁴⁾上質の薄手毛織物を製造すべく品質改良を進めたのである。レヴァント向け

図2 各司教区の一般用毛織物生産者数（単位：千人）



毛織物の取引は当初は伸び悩み、一六七二—一六七四年の輸出数は二二二二反にとどまったが、コルベールの死後に成果が現れはじめ、一六九八年には三二〇〇反に達した。⁽³⁵⁾ その後も王立マニユファクチュア

出典：AD Hérault, C 4678, Mémoire en 1733; PÉLAQUIER, E., *Atlas historique des États de Languedoc*, 2014 (Pierresvives).

反にのぼった。小織物の主産地は、ローヌ川以西のジュヴォダンと

ユアは発展し、一八世紀にはカルカソンヌとクレルモンを中心に複数の施設が稼働していた。⁽³⁶⁾

しかし、レヴァント向け毛織物の成長のより大きな原動力となったのは民間の活力である。一七六八年の覚書には、製造の主体として王立マニユファクチュア一五軒に加え、民間のマニユファクチュア四軒、一のギルドに属する二五〇の手工業者（職人数二五万人）が挙げられている。これらの担い手により八万反の毛織物が生産されたが、その約半分はカルカソンヌのギルドによるものであった。⁽³⁸⁾

レヴァント向け毛織物以外に、一般用毛織物も民間の主導で製造されていた。一七三三年の覚書に基づき、各司教区における一般用毛織物の生産者数を地図上に示したのが図二である。これを見ると、二司教区中一六区に、それぞれ数百人から多い所では一〇万人ほどの生産者があり、産地は都市から農村部まで各地に広がっていた。⁽³⁹⁾ 一般用毛織物は、国内とスペイン、イタリアなどの諸外国に向けた並質毛織物と、国内と諸外国に加えてアメリカ植民地にも流通した比較的廉価な小織物に分けられる。並質毛織物としては、主にカルカソンヌとその近郊リムーの山間部で、薄手のセイザンなどが製造された。生産量は一七四四年に二万五〇〇〇反を超えていたが、低品質なリムー産のゆえに評判が落ち、一七六八年には八〇〇〇反に減少した。⁽⁴⁰⁾ ロデーヴで製造される軍服用で厚手の

セヴェヌヌであった。ジェヴォダン⁽⁴²⁾は薄手のサージとインペリアル、厚手のカデイスを特産品とし、一七六八年の生産量は一〇万反にのぼった。セヴェヌヌでもインペリアルが一七六八年に八〇〇〇反生産された⁽⁴¹⁾。

これらの一般用毛織物は、生産量のみならず販売額においても重要な割合を占めた。一七六八年の毛織物の利益のうち、四五%はレヴァント向け毛織物によるものだが、残る五五%は一般用毛織物が占めている⁽⁴²⁾。つまり、ラングドックでは王権の保護によって毛織物産業が復興したが、王立マニユファクチュアで生産されたのはレヴァント向け毛織物の約半分にすぎず、むしろ民間の手工業や農家が製造する種々の毛織物によって成長が促されたのである。

この伝統産業に加え、一七世紀後半から絹産業が新たに台頭してくる。一六世紀にニームで生まれた絹産業は小規模にとどまっていたが、一七世紀後半から貴族と上層ブルジョワを中心に奢侈品が流行って絹需要が増大し、絹産業の発展を促した⁽⁴³⁾。コルベールはこの奢侈品産業の保護・育成にも関心を寄せ、ル・ピュイに王立マニユファクチュアの導入をはかるが、その試みは住民の反対により挫折している⁽⁴⁴⁾。したがって、絹産業の成長は民間の主導でもたらされた。なお、桑栽培はローヌ川以西のニーム、ユゼス、ヴィヴィエとトゥールーズの近郊で広がり、この二つの地域が絹産業の中心地となった⁽⁴⁵⁾。

絹織物の最大の産地となったのはニームである。コルベールは国内産業保護策の一環として絹生産が盛んだったアヴィニオン教皇領からの絹輸入を禁じ、アヴィニオンの絹産業は不振に陥った。失業

したアヴィニオンの職人の多くを受け入れてニームの絹産業は急成長し、一六八一年に二一〇〇の絹織物手工業者（職人数四〇〇〇人）を抱えるほどになる。その後、ナント王令の廃止でプロテスタントの多かったニームの絹産業は大打撃を受けるが、一八世紀初めには立ち直って再成長を遂げ、一七六八年には一九〇〇の手工業者を抱えていた⁽⁴⁷⁾。このようにニームの絹織物が成功を収めたのは、価格の手頃さと製品の多様性にある。ビュラトという低価格の絹と羊毛の交織物で発展したニームの絹織物業は、タフタやサテンといった純絹織物の製造にも乗り出し、顧客の嗜好を先取りする豊富な品揃えを誇った。一七四〇年代の絹織物の総生産量は四万反にのぼるが、特に需要が大きかったのは絹毛交織物のパブリン⁽⁴⁹⁾、ビュラト、および純絹織物のタフタであった⁽⁵⁰⁾。トゥールーズも一七世紀後半からグリゼットという絹毛交織物を製造して、ニームに次ぐ絹織物の産地となり、一七四〇年代のグリゼットをはじめとする絹織物の総生産量は二万反を超えている。その他、一七六八年にはモンブリエ、ナルボンヌ、ラヴォ、ル・ピュイでも小規模ながらマニユファクチュアが存在した⁽⁵¹⁾。これらラングドック産絹織物は、国内だけではなく、諸外国、アメリカ植民地にも広く流通した。

絹織物以上に顧客を集めたのが絹小物である。ニーム、ユゼス、アレでは靴下、帽子、下着などの編み物製品が、アレではリボン、ル・ピュイではレースが製造されていた。なかでも靴下産業は成長が著しく、一七〇六年にはニームだけで八七〇の手工業者が数えられていたが、一七四四年までにニーム、ユゼス、アレで五一〇〇⁽⁵²⁾、一七六八年にはそれ以外の地域も加わり一万と倍増した。靴下の素

材には絹、綿、羊毛の三つがあったが、なかでも高価な絹製靴下がスペインとその植民地に大きな市場を獲得した。一七六八年に製造された二〇万足のうち三分の二が絹製であり、その九〇%がカディスとスペイン領アメリカ植民地に輸出され、残りは国内で消費された。⁽⁵⁷⁾

以上見てきたように、ラングドックは一七世紀後半から繊維産業で繁栄した。その契機は王権の産業・貿易振興策にあったが、同産業の成長には、世界へ開かれた港であるポルドーとマルセイユとのつながりや、地場産業の発展を担った地元の手工業者の活動が重要な役割を果たした。特にニームのようなプロテスタント都市は、王権の保護を受けなければかりか、むしろその宗教政策に翻弄されながらも、産業を発展させていった。これらの多様な担い手は、市場ニーズに応え、また先取りする豊富な製品を提供することで、国内、諸外国、アメリカ植民地へと販路を広げたのである。これら地域に根差した手工業は都市から農村へと広がり、農村工業として発展した。こうした農村工業の展開を可能とする重要な条件のひとつが、諸産業に携わる人々の食糧需要を満たせるだけの穀物生産の増大である。

(三) 穀倉地帯の形成

ラングドックで諸産業が活発になる数十年前の一六三〇年代、オ・ラングドックには穀倉地帯が形成され、そこで生まれた余剰は、パ・ラングドックはもちろん、フランス各州、諸外国、アメリカ植民地にも供給され、各地で食糧問題の改善に寄与していた。このよ

うな穀物生産の増大には、「新大陸」の農産物の導入が深く関係している。すなわち、アンティル諸島産インディゴの流通でラングドック産バステルの栽培は減少するが、バステルに代わって「新大陸」から伝わったトウモロコシの栽培が始まり、穀物の余剰が生まれたのである。

青色染料の原料となるバステルの葉は、一六世紀前半にはトゥールーズ、アルビ、カルカソンヌを結ぶロラゲ地域の三角地帯において生産され、ラングドックの主要な輸出品となった。ラングドック産バステルは、大西洋側のポルドーやバイヨンヌを介してイングランド、フランドルへ、地中海側のナルボンヌやエグモルトを介してマルセイユ、イタリア都市、スペインへと販路を見出し、その取引で繁栄したトゥールーズは赤レンガの建築群に彩られた「バラ色の町」(La ville rose)に生まれかわった。しかし、一七世紀にアンティル諸島からより安価なインディゴが流入し、染料として広く用いられるようになると、バステル貿易は衰退を余儀なくされる。⁽⁵⁸⁾

このようにバステル栽培が後退すると、それに代わってトウモロコシ栽培が始まる。一五〇〇年に「新大陸」からアンダルシアにもたらされたトウモロコシは、イベリア半島を通じて一七世紀初めにアキテーヌとラングドックに伝えられ、一六三七年一月五日に初めてロラゲ地域の小都市カステルノダリの市場に登場している。トウモロコシは、まずロラゲ地域でバステルに代わって栽培されるようになり、その栽培地域はオ・ラングドックに徐々に拡大した。この新たな雑穀が住民の食糧や家畜の餌として消費されたため、オ・ラングドックでは小麦をはじめとする穀物の余剰が生まれ、輸出が

表1 1750年ラングドックにおける穀物の余剰と不足

司教区	人口	収穫量 (スチエ)	需要量 (スチエ)	余剰(%)： 移出先	不足(%)： 供給元
アルビ	100,000	520,000	450,000	70,000 (13,5%)： ACDE	
バ・モントバン	29,000	191,000	159,000	32,000 (16,8%)： CDE	
サン＝パプール	28,120	108,250	64,650	43,600 (40,3%)： ACF	
カルカソンヌ	55,000	161,550	244,000		82,450 (51%)： B
ナルボンヌ	36,000	160,500	69,500	91,000 (56,7%)： AF	
モンプリエ	82,000	106,000	192,000		86,000 (81%)： BG
ニーム	100,000	82,060	120,000		37,940 (46,2%)： BFH
アレ	100,000	25,700	133,900		108,200 (421%)： ADG
マンド	122,900	377,500	450,000		72,500 (19,2%)： G
A バ・ラングドック B オ・ラングドック C トゥールーズ D ルエルグ E ボルドー F プロヴァンス G オーヴェルニュ H プルゴレニユ					

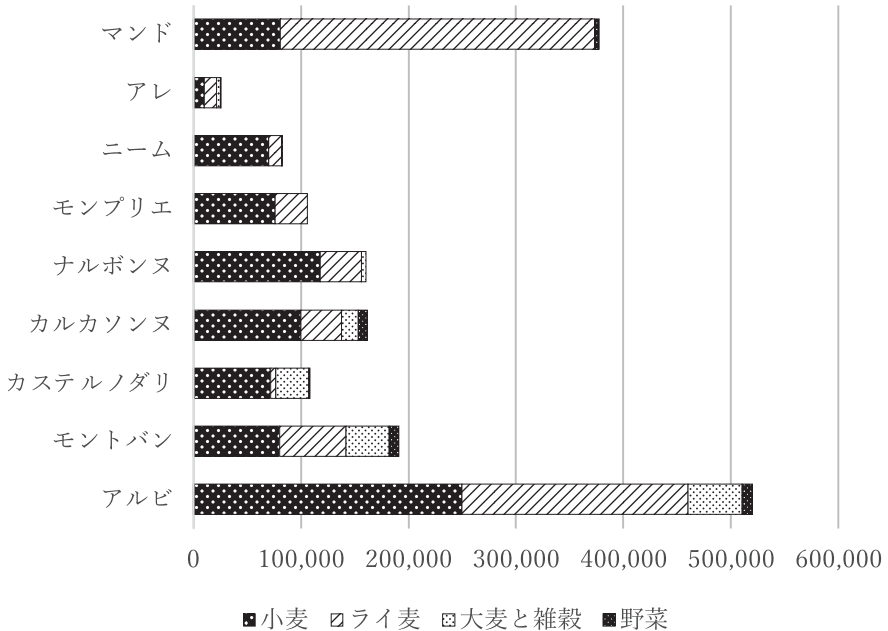
出典：AD Hérault, C 46, Etat des grains en 1750.

可能になった。⁽⁵⁹⁾

こうしてラングドックでは州全体として穀物が多く産出されるようになるが、穀物需給の状況は地域毎に異なっていた。一七五〇年の各司教区における人口、穀物収穫量、需要量から、余剰分と不足分の比率を算出したのが表一である。これを見ると、オ・ラングドックの大部分で人口に対する穀物供給量が十分で、余剰も生まれてきた。主要な穀物生産地であるアルビ、バ・モントバン、サン＝パプール(カステルノダリ)の各司教区では、収穫量が住民の需要量を大きく上回り、余剰分は周辺地域や他州に供給された。例えばサン＝パプール司教区における小麦、ライ麦、トウモロコシの総収穫量一〇万八二五〇スチエは、総人口二万八二二〇人に必要な量六万四六五〇スチエをはるかに上回った(図三)。住民が消費しない約四〇%にのぼる余剰穀物は、トゥールーズやバ・ラングドックにとどまらず、プロヴァンス州にも供給された。一方カルカソンヌ司教区では収穫量が需要量を満たすには不十分で、八万二四五〇スチエの穀物が不足しており、毛織物産業の急成長が農業の後退を招いたのではないかと考えられる。⁽⁶¹⁾

穀倉地帯を形成するオ・ラングドックとは対照的に、バ・ラングドックではナルボンヌとベジエを除いて穀物が不足する傾向にあった。特に繊維産業の中心地であるニーム、アレ、マンドの各司教区や、葡萄酒の産地であるモンプリエ司教区では自給率が低かった。⁽⁶²⁾ また、トウモロコシはバ・ラングドックではあまり普及せず、ほとんど栽培されなかった。⁽⁶³⁾ 穀物の不足分を補うものとして、一部の地域では粟や「新大陸」伝来のジャガイモが食糧として消費されてい

図3 1750年ラングドックの穀物収穫量



出典：AD Hérault, C 2880; C 2923.

それでも、一八世紀前半は、食糧確保の懸念から一七三一年の王令などで葡萄の苗木の植えつけを禁じる措置が講じられ、葡萄畑の拡大は抑制されていた。しかし、住民の間では法を無視した苗木の植えつけが相次ぎ、一七五〇年代には王権による規制が撤廃され、それ以降、葡萄畑は急速に拡大していった。⁽⁶⁷⁾ラングドック産の葡萄酒とブランデーは、内陸を通過してポルドーへ、またセットから地中海を渡って、諸外国やアンティル諸島へ輸出され、一八世紀後半にその取引量は急増した。⁽⁶⁸⁾一八世紀における葡萄畑の拡大は、ラングドックの農業構造を変容させた。まず、一七〇九年を境にオリーブの木的大部分が消滅し、葡萄の苗木がこれに取って代わった。また、地中海側のバ・ラングドックのうち土壌が穀物に適さない地域は、葡

このような自給率の地域間格差が広がった一因として、葡萄畑の増加が考えられる。ラングドックでは一六世紀から各地で葡萄栽培が行われてきた。一七世紀後半の不況により葡萄畑は減少するが、売れ残った葡萄酒からブランデーが製造されるようになる。この新しいアルコール商品は、セット商事会社があるランダに輸出したのを契機として北欧諸国に販路を見出し、ラングドックの葡萄酒生産を再び活気づけた。⁽⁶⁵⁾また、オリーブ畑の減少も葡萄畑の拡大を促した。ラングドックでは一七〇九年の冷害によりオリーブ畑が壊滅的な被害を受け、生育に時間のかかるオリーブの木代わりに葡萄の木を植える地主が増加したのである。⁽⁶⁶⁾

た⁽⁶⁴⁾

葡栽培に特化するようになった。一八世紀後半になると、モンプリエ周辺地域は三分の一が葡萄畑となり、ローヌ川流域の一部ではモノカルチャー化が進む。その一方で、肥沃な土壌に恵まれた内陸のオ・ラングドックでは、葡萄栽培が活発化したガイヤックを例外として、むしろ穀物生産が増大した。⁽⁶⁹⁾このような農地の棲み分けが進んだのは、バ・ラングドックだけでは十分に自給できないとしても、穀倉地帯から供給される余剰穀物によって食糧が確保できるようになったからだと考えられる。

一七・一八世紀のラングドックでは繊維産業と農業が共に盛んとなり、地域経済を活性化させた。このような経済成長は、地域内における繊維産業と農業の分業、また商品作物と基礎食糧作物との分業が成立したことで可能になったのである。

三 穀物市場と食糧供給

(一) 市場の活動

豊かな穀倉地帯を抱えるラングドックにとって、穀物は地域住民の食糧としてだけではなく、富をもたらす輸出品としても重要性を持つようになる。オ・ラングドックの余剰穀物は、繊維産業や葡萄酒製造に従事する人口の多いバ・ラングドックに供給されたのみならず、穀物の不足するプロヴァンス州や、諸外国、アメリカ植民地にももたらされたからである。以下では、穀物市場の動向とそこでの貿易商人の役割に焦点を当て、どのようにに穀物が流通し、食糧供給が確保されていたのか、その実態の一端を明らかにする。

市場は地域の余剰生産物の交換の場として生成し、中世から都市

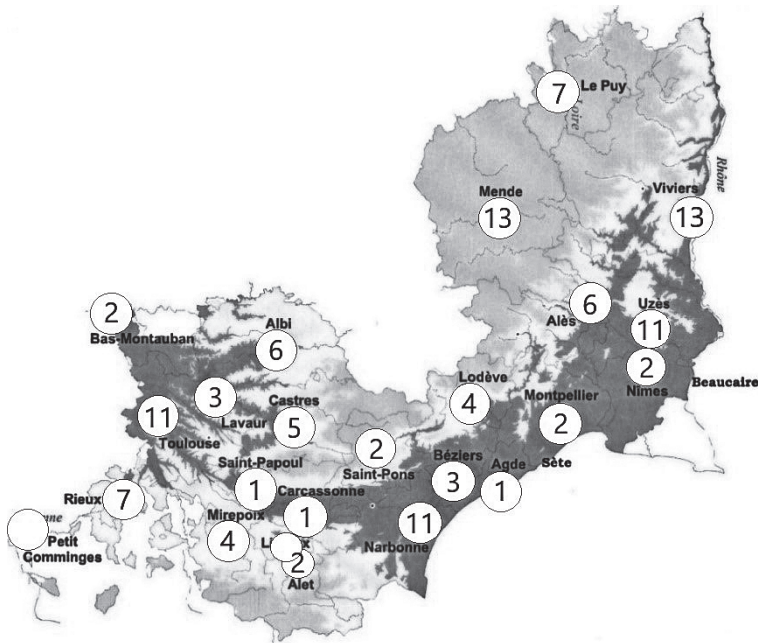
の多くがこの市場を中心として形成・発展してきた。ただし、十分の一税や小作料として徴収された分は領主が保有しており、商人が領主から直接買いつけることもあったため、市場で全ての余剰が取引されたわけではない。それでも、穀物市場の活動を観察することで、穀物の流通経路と供給状況を一定程度把握することは可能である。

一七六〇年代に地方長官が行った調査に基づき、各司教区に存在した穀物市場の数を地図上に示したのが図四である。これによれば、穀物市場の地理的分布には次のふたつの傾向が見られる。⁽⁷⁰⁾まず、多くの市場が地中海、河川、運河といった水路の近くに立地している。重い穀物の輸送には船が最も適していたからである。また、一部の地域を例外として各司教区に穀物市場は一カ所ないし数カ所しかない。このことから、旧来の小規模な市場が減少し、いくつかの都市に市場機能が集中するようになったと推定される。

このような分布の特徴を理解するには、穀物市場の機能を検討する必要がある。穀物市場は域外への移輸出を担う対外市場と、域内に販売先が限られた地域市場に大別される。さらに、地域市場は、周辺地域の生産者から穀物を集めて分配する役割を持つものと、地域の余剰を住民に販売するものに分けられる。こうした機能を持つ市場のうち、対外市場を中心に地域市場の統合・集約化が進み、その一方で住民への販売に限られた一部の地域市場も存続していたように思われる。

穀物市場の相互につくるネットワークの特徴は、地域によって異なっていた。まず、穀倉地帯と海港では、移輸出のためのネットワ

図4 ラングドックの司教区と穀物市場



出典：AD Hérault, C 2908, État de marchés, vers 1760; PÉLAQUIER, E., *op. cit.*

ークが形成された。対外市場は、州外への穀物の移輸出を担うことから、大西洋と地中海を結ぶ主要な水路の近くに存在した。地域市場の多くは、これらの対外市場に従属しながら、生産者から穀物を集めて分配する役割を果たした。このネットワークに関わらない地域市場もあったが、小規模で数が少なかった。オ・ラングドックでは、バ・モントバン、トゥールーズ、サン・パールの各司教区に対外市場が存在した。

ガロンヌ川でボルドーにつながるバ・モントバン司教区には、大西洋に向けた対外市場が、ガロンヌ川に近いカステルサラザンとタルン川沿いのヴィルミュールに設けられており、ここから、熱帯の気候に耐えうる良質な小麦がボルドーを介してアンティル諸島などへ輸出された。⁽⁷²⁾

ガロンヌ川とミデイ運河の分岐点に位置するトゥールーズ司教区には、ボルドーとマルセイユに穀物を移出するための対外市場が、トゥールーズ、タルン川とガロンヌ川にはさまれたフロントン、ガロンヌ川沿いのオートリヴ、ミデイ運河沿いのヴィルフランシュに開かれ、その他にも四つのブルと四つの村に地域市場があった。オ・ラングドックの穀物取引の中心地であるこれらの市場は、隣接する諸司教区から穀物の供給を受けていた。なかでも重要な役割を果たしたのがアルピ司教区であり、地域市場が六カ所あるなかで、一カ所を除いて対外市場に寄与していた。その中核的拠点となったアルピの地域市場には、タルン川流域で生産された穀物が集められ、陸路でトゥールーズやバ・ラングドックへ、コルドの地域市場を通ってルエルグ

へ、タルン川沿いのガイヤック、リスル、ラバスタンの地域市場を経由してモントバンやボルドーへ供給された。

ミディ運河の途上に位置するサン＝パール司教区には、大西洋と地中海の交易の十字路をなすカステルノダリに唯一の対外市場が開かれていた。ここにはロラゲ地域や隣接する諸司教区の穀物が集められ、トゥールーズ、バ・ラングドック、プロヴァンス州に供給された。

地中海側のバ・ラングドックに関しては、穀物移輸出を担う海港セット、アグド、ナルボンヌの活動と密接に結びついて対外市場が機能していた。

ミディ運河の出口の近くに位置するベジエ司教区には、プロヴァンス州に向けた対外市場がベジエに開かれており、周辺地域やオ・ラングドックから穀物が集められて、アグドやセットの港からマルセイユに移出された。その他に住民向けの地域市場が二カ所存在した。

ミディ運河から陸路とロビーヌ運河で地中海に出ることができたナルボンヌ司教区には、ナルボンヌに対外市場が開かれており、それ以外に住民向けの地域市場が三つのブルと七つの村に設けられていた。ナルボンヌはバ・ラングドックの穀物取引の中心地であり、周辺地域やオ・ラングドックから穀物が集められ、バ・ラングドックの住民に供給されるか、プロヴァンス州、ルシヨン州、スペインに移輸出された。

その一方で、バ・ラングドックの穀物自給率の低い地域では、住民の食糧供給のためのネットワークが形成されていた。こうした地

域には対外市場がなく、地域市場が住民の食糧需要を満たす不可欠な役割を果たした。これらの市場では、地域の余剰だけではなく、他の司教区や州からもたらされた穀物も販売された。葡萄酒の広がるモンプリエ司教区は穀物自給率が低かったが、モンプリエとリュネルの市場は、オ・ラングドックからの穀物をバ・ラングドックの住民に供給していた。また、ローヌ川以西に位置し、繊維産業の盛んなセヴェンヌやヴィヴァレの諸司教区も、穀物の自給は不可能であった。それでも、ユゼス、ニーム、アレの各司教区まではオ・ラングドックの穀物がリュネルやボケールを経由して流通していたが、より内陸に入ったヴィヴィエ、ル・ピュイ、マンドの各司教区までは届かず、ローヌ川でつながるブルゴーニュ州やオーヴェルニュ州から穀物の供給を受けていた。

以上見てきたように、穀物自給率の低いバ・ラングドックでは、住民への食糧供給を目的とした地域市場が比較的多く存続したが、それ以外の穀倉地帯と穀物輸出港のある地域では、ボルドーとマルセイユ、諸外国、植民地に穀物を移輸出するために市場ネットワークが再編成された。つまり、ラングドックの穀倉地帯からの供給は、地域住民だけではなく他州や諸外国、大西洋の植民地にも向けられていた。このように大規模化する穀物流通を支えたのは貿易商人たちである。

(二) 貿易商人と穀物流通

一大穀倉地帯を抱えるラングドックの貿易商人は、州内外での穀物流通を担うことで、各地の食糧供給に不可欠な役割を果たした。

商人が生産者から買い取った穀物は、州内の市場で販売されるか船に積み込まれ、ガロンヌ川からボルドー、そして大西洋へ、またナルボンヌ、アグド、セットの港から地中海へ向かったのである。

ところで、商人が穀物取引を行う環境は、様々な貿易障壁があったために複雑を極めた。中世から領主、都市、州の多くは、流通する商品に対して独自の通行税を課してきた。これに介入したのが王権であり、コルベールは一六六四年に州間の交易の自由と統一関税の導入を試みた。しかし、この措置の対象範囲に含まれたのは王国内一五州だけで、九つの「外国とみなされる州」では独自の通行税が維持され、三つの「外国として扱われる州」と三方所の自由港では外国との交易が継続された。南フランスではラングドック、プロヴァンス、ギューエヌヌが「外国とみなされる州」に、マルセイユが自由港に属していたため、これらの州や港の間では「外国」として取引が行われた。⁽⁷³⁾

さらに、王権は臣民の食糧確保の観点から、王国からの穀物流出を防ぐために、輸出入の許可や禁止、関税の操作、輸出時の申告手続きの義務づけなどによって穀物貿易を規制した。⁽⁷⁴⁾一八世紀半ばになると、穀物に対する通行税の一部廃止（一七三九年）や、国内外の穀物取引の自由（一七六三—一七六四年、一七七四年）に向けた規制緩和の動きも見られたが、王権による操作は革命前夜まで続くことになる。⁽⁷⁵⁾

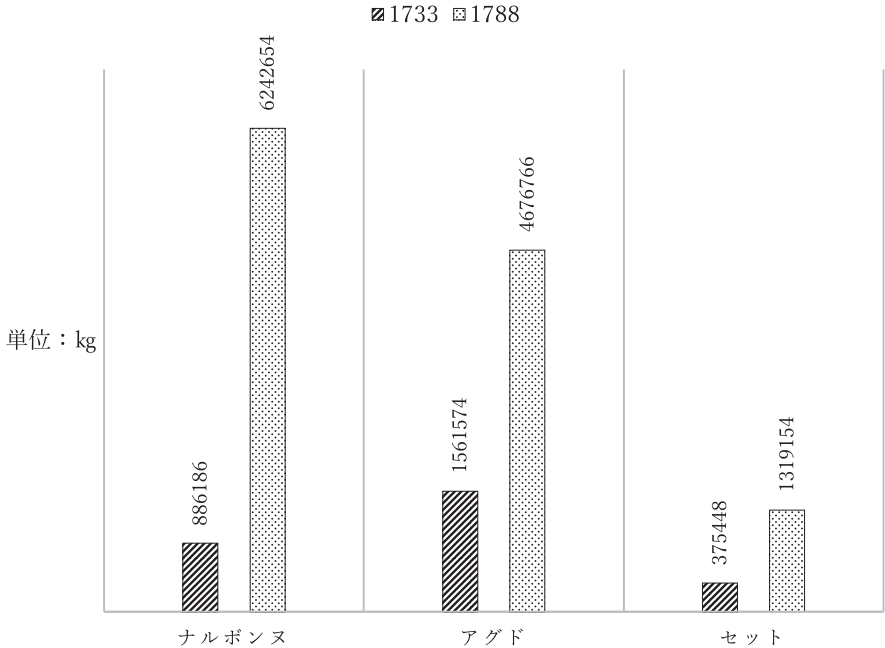
こうした制約があるなかでも、穀物生産の豊かなラングドックには州外への移輸出が度々許可され、商人はその流通を担った。まず、一六九八年に地方長官の命令で、ガロンヌ川とナルボンヌ、アグド、

セットの港から、プロヴァンス州、ドフィネ州、王国諸州への移出が許可され、また一七〇一年にはナルボンヌ、アグド、その他の港から、プロヴァンス州、王国諸州、スペインとイタリアへと、その範囲は拡大した。⁽⁷⁷⁾さらに、一七〇三年の国王顧問会議裁決は、ラングドックの豊作により生じた過度の余剰穀物を処理するため、外国への輸出を免税としている。⁽⁷⁸⁾つまり、ラングドックの穀物は、不作により移輸出が禁止された数年を除いて、他州や諸外国に流通していたのである。

ラングドックの穀物の主な移輸出先は、一七世紀はボルドーであったが、一七世紀末にミディ運河が建設されてからは地中海側の比重が高まり、穀物の不足するバ・ラングドック、プロヴァンス州、スペインへの供給が重要性を増した。⁽⁷⁹⁾このことは、史料の残る一七三三年と一七八八年の穀物移輸出記録から確認できる。以下では、各年の一—九月について、穀物の輸出状況を比較検討する。

まず、一七三三年の記録はプロヴァンス州の食糧不足に対する特別措置が取られた時期にあたり、同州に向けた移出に限られる。プロヴァンス州では一七世紀に穀物が不足し、外部からの供給に依存するようになる。マルセイユはレヴァント地方と北アフリカ、イタリア、スペイン、北ヨーロッパから穀物を輸入していたが、ラングドックからの供給にも頼っていた。⁽⁸⁰⁾一七三〇年代にプロヴァンス州で不作による食糧不足が生じ、王権が他州からプロヴァンス州への移出を免税とした際には、ラングドックの港から多くの穀物を受け入れている。なお、一七三三年一—九月における穀物輸出货量を見ると、主要な穀物輸出港はアグド（ラングドック三港総計の五五%、

図5 ラングドックの港からの穀物輸出量



出典：AD Hérault, C 2880; C 2923.

以下同じ)とナルボンヌ(三二%)であり、セツトの役割は小さい(図五)。これらのラングドック諸港からマルセイユ、トゥーロン、モナコなどのプロヴァンス州の諸港に穀物が輸送されたのである。⁽⁸²⁾

次に、一七八八年の記録は、通常の活動が行われていた時期のものである。⁽⁸³⁾ これを見ると、アグドの移出先はマルセイユだが、ナルボンヌとセツトはスペインへも輸出している。スペインでは一七世紀からラングドックの穀物が流通して、一八世紀には主要な輸出先となる。なお、一七八八年—九月における穀物輸出では、ナルボンヌ(五一%)がアグド(三八%)に上回っている。ナルボンヌの再興は、一七八七年にジョンクシオン運河が完成したことで穀物流通が活発化し、スペインとの関係も強化されたことにより促されたと考えられる。⁽⁸⁴⁾

ラングドックの港が他州や諸外国の穀物供給に果たす役割は、一八世紀に急速に拡大した。実際、各港からの輸出量を一七三三年と一七八八年それぞれ九カ月間について比較すると、三港合計では四・三倍に、ナルボンヌに限るなら七倍になっている。こうした穀物輸出港の急成長の背景には、後背地における穀物生産量の増加があった。一七四四年のラングドックの生産量は五二五〇万キログラムだったが、一七六八年には三億四四〇〇万キログラムと六・五倍になっている。穀物生産が活発化したのは、まず運河の建設と市場の再編成で内陸の穀物流通が円滑化され、また一八世紀半ばから穀物取引の規制緩和が始まって、州外への販路が拡大したからと考えられる。

このように穀物輸出を担っていた貿易商人たちは、地域住民の食糧の確保のためにいかなる役割を果たしていたのか。この問いに答えるには、都市の食糧供給についてより詳細な調査が必要だが、一七七二年に実施された穀物を扱う商人の調査から、商人の類型と地域とのつながりがある程度把握することはできる。

貿易商人は、自己資金で活動する独立した商人と、商社会社からの派遣商人に分類される。⁸⁶⁾ オ・ラングドックの穀倉地帯や地域市場のないセツトとアグドの海港には、派遣商人が多かった。派遣商人は地域とのつながりを持たず、穀物移輸出で利益を得ることを優先する傾向にあったため、時に不信任をもつて見られた。例えば、アルビ司教区では商人の大部分が穀物の移出を担った。アルビの商人四名のうち、一名は住民の食糧供給に寄与する独立した商人だったが、二名はルエルグやトゥールーズに穀物を移出しており、もう一名は「監視が必要」であった。また、ガイヤックの商人四名中、二名が「注意が必要な」、ないし「信頼できない」派遣商人であったし、ラバスタンの商人一名はボルドーの商社会社のために活動する派遣商人であった。⁸⁷⁾

これに対し、バ・ラングドックのナルボンヌ、ベジエ、モンプリエでは、大部分が独立した商人であった。これら地元商人は日常的に住民への穀物供給を担い、大きな信頼を寄せられていた。海港と地域市場の機能を持つナルボンヌでは、商人一三名のうち九名が「信頼に値する」独立した商人であり、残る四名は派遣商人であった。⁸⁸⁾ 実際、ナルボンヌの商人は食糧不足の際に市と連携して穀物供給に取り組んでおり、ブルジョワとしての連帯感を持って活動して

いたと考えられる。一七五〇年五月にナルボンヌが食糧不足に陥った際には、地元の穀物商人パスカルが、市参事会の要請を受けて、住民の食糧供給に必要な穀物をセツトまで買いつけに行っている。⁸⁹⁾ フランスとその植民地における分業が進み、一部の地域で輸入に頼らなければ十分な食糧を確保できなくなるにつれ、異なる地域間の相互依存関係はより強まっていった。様々な活動を行って諸地域を結びつけたのは貿易商人であり、その商業ネットワークこそが地域の食糧供給の生命線をなしていたのである。

おわりに

かつて中世地中海貿易で繁栄したラングドックの港は、海上商業の中心が大西洋に移っても、世界貿易港のマルセイユとボルドーと密接に関わりながら、独自の発展を遂げていった。地中海の伝統的なレヴァント市場が復興し、また大西洋の世界市場が興隆するなかで、ラングドックではふたつの海を結びつけるための内陸の水路が整備され、水路に沿ってナルボンヌに加え、セツトとアグドが台頭した。これらの港は、世界貿易港に様々な輸出品を供給する役割を果たすようになる。

このようなラングドックの港の新たな活動は、内陸の後背地の経済成長を促した。ラングドックの諸産業は、国内にとどまらず、ヨーロッパ諸国、さらにはレヴァント地方やアメリカ植民地で広く顧客を獲得し、その需要に応えるために、一八世紀には都市から農村部に至るまで各地で繊維製品の作業所が活況を呈した。これは、穀倉地帯の生産者と、穀物の流通・取引を担う貿易商人の活動に支え

られていた。新大陸の作物の導入が田園風景を変容させ、トゥールーズからカステルノダリに至る地域には麦畑とトウモロコシ畑が広がる一方で、モンブリエやローヌ川以西では葡萄畑が拡大していた。それぞれ特有の経済構造をなす諸地域間の距離は交易路の整備によって縮小し、穀物を州内、他州、諸外国、アメリカ植民地に流通させるネットワークの再編成が進んだ。そして、貿易商人たちの多くは、商売としてのみならず、住民の食糧供給のためにも、様々な貿易障壁にも関わらず、広範囲にわたって穀物流通を担ったのである。

このようにして、南フランスで商品経済が進展するにつれ、一部の地域は次第に食糧を移輸入に依存するようになっていった。一方で、一八世紀のフランス全体として、食糧問題が解決してはおらず、たびたび不作による食糧不足と物価高が生じ、穀物自給率の低い地域では深刻な影響を及ぼした。こうした状況のなかで、穀物貿易が活発な南フランスでは、一八世紀後半に食糧問題を焦点として、市場と政治の関わり方が問い直されていくであろう。

註

- (1) YOUNG, A., *Voyages en France*, Paris, Éditions Tallandier, 2009, p. 107.
- (2) 一五世紀末から本格化する探検航海と植民地建設により、ヨーロッパの商業圏はアメリカ、アジア、アフリカに及び、世界的な規模で経済活動が展開される。本稿では、こうした世界的な規模での商業活動を「世界商業(貿易)」、生産・交換・消費の流れを「世界経済」という用語で表す。
- (3) GAINOT, B., *L'empire colonial français de Richelieu à Napoléon*, Paris, Ar-

mand Colin, p. 2015, p. 11-54.

- (4) BRAUDEL, F., *La méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris, Armand Colin, 2017, 2 vol. ; I・ウォーラー・ステイン著、川北稔訳『近代世界システム1600-1750』名古屋大学出版会、一九九四年。
- (5) BUTEL, P., *Les négociants bordelais: l'Europe et les ttes au XVIII^e siècle*, Paris, Aubier, 1974, p. 98-104. ; ホール・ビッテル著、深沢克己・藤井真理訳『近代世界商業とフランス経済―カリブ海からバルト海まで』同文館出版、一九九七年、八七―九七頁；深沢克己『海港と文明―近世フランスの港町』山川出版社、二〇〇二年、二二―二二八頁。
- (6) LE MAO, C., *Les villes portuaires maritimes dans la France moderne XV^e-XVIII^e siècle*, Paris, Armand Colin, 2015.
- (7) BRAUDEL, F., *op. cit.*, t. II, p. 181-205.
- (8) 深沢克己『商人と更紗―近世フランスス・レヴァント貿易史研究』東京大学出版会、二〇〇七年、八五頁。
- (9) SOBOL, A., *Les Sans-Culottes parisiens en l'An II: mouvement populaire et gouvernement révolutionnaire*, Paris, Flammarion, 1973.
- (10) LE ROY LADURIE, E., *Les paysans de Languedoc*, Paris, Flammarion, 1969.
- (11) FRÈCHE, G., *Toulouse et la région Mât-Pyrénées au siècle des lumières vers 1670-1789*, Paris, Éditions Cujas, 1974.
- (12) LARGUIER, G., *Le drap et le grain en Languedoc: Narbonne et Narbonnais 1300-1789*, Perpignan, Presses universitaires de Perpignan, 1999.
- (13) ホール・ビッテル、前掲書、三〇頁。
- (14) 一四世紀の洪水でオート川の流がそれ、ロビース運河で地中海に出るようになった。
- (15) MICHAUD, J. et CABANIS, A. (dir.), *Histoire de Narbonne*, Toulouse, Privat, 1981, p. 142-162; LARGUIER, G. (1999), p. 46-47.
- (16) 一三世紀にルイ九世は、十字軍の基地として城塞都市エタールモルトをローヌ川三角洲の湿地帯に建設した。WOLFF, P. (dir.), *Histoire du Languedoc*,

- oc, Toulouse, Privat 1990, p. 215, 248-249.
- (17) BRAUDEL, F., *op. cit.*, t. I, p. 214.
- (18) LARGUIER, G. (1999), p. 419-421.
- (19) Édité sur la franchise du port de Marseille, mars 1669 ; 柴沢京口 (110011 年) 『長崎圖』.
- (20) LÉON, P., *Histoire économique et sociale du monde*, Paris, Armand Colin, 1978, t. III, p. 73.
- (21) 十一月九日「日の開基勅書に於て、マッセイヨカニ一十七世紀に大西洋へ飛出つてきたりしが記せられたる」。Lettres patentes, portant règlement pour le commerce qui se fait de Marseille aux îles françaises de l'Amérique, février 1719.
- (22) Lettres patentes, portant règlement pour le commerce des colonies françaises, avril 1717.
- (23) 柴沢京口 (110011 年) 『長崎圖』、『長崎圖』, p. 34.
- (24) 柴沢京口 (110011 年) 『長崎圖』.
- (25) ランズシェマンの親戚ハット商事会社 (一六六二—一六八四) の設立や一七〇〇年のマッセイヨカにケスニアで見舞われた際にマッセマンニ圖成の參事シヤチカシカシヤの協力を頼むことになったこと。WOLFF, P. (dir.), *op. cit.*, p. 404-405 ; 柴沢京口 (110011 年) 『長崎圖』, p. 111—117 圖。
- (26) AD Gironde, 6 B 288, Départs des navires en 1682.
- (27) BUTEL, P., *op. cit.*, p. 15-23.
- (28) *Ibid.*, p. 24-35.
- (29) Édité de saint-Germain d'octobre 1666, AD Aude, 11 C 63, Extrait et analyse de ce qui a été dit et délibéré sur le canal du Mûri à l'assemblée des États généraux du Languedoc, 1665-1789.
- (30) BUTEL, P., *op. cit.*, p. 100.
- (31) AD Aude, 11 C 65, Recueil de pièces relatives au projet du canal de Narbonne, 1686-1768, LARGUIER, G. (1999), p. 765, 1032-1055.
- (32) BOISSONNADE, P., «La restauration et le développement de l'industrie en

- Languedoc au temps de Colbert», *Annales du Midi*, 1906, p. 441.
- (33) WOLFF, P. (dir.), *op. cit.*, p. 287-291.
- (34) AD Hérault, C 4677, Mémoire par le subdélégué de Carcassonne en 1731.
- (35) BOISSONNADE, P., «Colbert, son système et les entreprises industrielles en Languedoc (1661-1683) », *Annales du Midi*, 1902, p. 10-27.
- (36) 柴沢京口 (110011 年) 『長崎圖』, p. 111-116 圖。
- (37) AD Hérault, C 4679, Mémoire en 1750-1751.
- (38) 市川政利がわたしたちの國産毛織物「シロロンズン」、「シネロンズン」や外國毛織物「白綿ロンズン」、「ロンズン」を、マッセマンニ地方だけにとどめて一掃せんとなつた話を聞いて、マッセマンニ地方の毛織物工場が、AD Hérault, C 2949, Mémoire en 1768.
- (39) ロネーニ圖成区とマッセマンニ圖成区との毛織物競争、圖成区に力をつけてきたこと。
- (40) AD Hérault, C 2949, Mémoire en 1744; Mémoire en 1768.
- (41) *Ibid.*
- (42) *Ibid.*
- (43) ROCHE, D., *La culture des apparences: une histoire du vêtement XVII^e-XVIII^e siècle*, Paris, Fayard, 1989, p. 97-116.
- (44) BOISSONNADE, P. (1902), p. 8-9.
- (45) BOISSONNADE, P. (1906), p. 442.
- (46) DE LINE TEISSEYRE-SALLMANN, *L'industrie de la soie en Bas-Languedoc*, Paris, École des Chartes, 1995, p. 177.
- (47) AD Hérault, C 2949, Mémoire en 1768.
- (48) DE LINE TEISSEYRE-SALLMANN, *op. cit.*, p. 177-178; AD Hérault, C 4679, Mémoire en 1750-1751.
- (49) マッセマンニ教皇領の製造がわたりながら綿織物の由来のこと。
- (50) *Ibid.*
- (51) BOISSONNADE, P. (1906), p. 442-443.

- (12) AD Herault, C 4679, Mémoire en 1750-1751.
- (13) AD Herault, C 2949, Mémoire en 1768.
- (14) DUTIL, L., «L'industrie de la soie à Nîmes jusqu'en 1789», *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 1908, p. 326-327.
- (15) AD Herault, C 2949, Mémoire en 1744.
- (16) AD Herault, C 2949, Mémoire en 1768.
- (17) *Ibid.*
- (18) WOLFF, P. (dir.), *op. cit.*, p. 278-285; LARGUIER, G., «Narbonne et la voie méditerranéenne du pastel (XV^e-XVII^e siècles) », *Annales du Midi*, 1998, p. 149-167.
- (19) WOLFF, P. (dir.), *op. cit.*, p. 337-338; FRÉCHE, G., *op. cit.*, p. 216-218; AD Herault, C 4677, Mémoire par le subdélégué d'Albi en 1731.
- (20) AD Herault, C 46, État des grains en 1750.
- (21) AD Herault, C 4677, Mémoire par le subdélégué de Carcassonne en 1731.
- (22) AD Herault, C 46, État des grains en 1750.
- (23) *Ibid.*
- (24) AD Herault, C 2949, Mémoire en 1768; C 4677, Mémoire par le subdélégué d'Alais en 1731.
- (25) GAVIGNAUD-FONTAINE, G. et LARGUIER, G., *Le vin en Languedoc et en Roussillon: de la tradition aux mondialisations XVI^e-XXI^e siècle*, Perpignan, Éditions Trabucraic, 2007, p. 28, 64-67; LE ROY LADURIE, E., *op. cit.*, p. 265-269.
- (26) AD Herault, C 2949, Mémoire en 1768.
- (27) GAVIGNAUD-FONTAINE, G. et LARGUIER, G., *op. cit.*, p. 89-91.
- (28) *Ibid.*, p. 76-77.
- (29) *Ibid.*, p. 45-46, 102; LE ROY LADURIE, E., *op. cit.*, p. 266.
- (30) AD Herault, C 2908, État de marchés, vers 1760; FRÉCHE, G., *op. cit.*, p. 784-785.
- (31) BAYARD, F. et GUIGNET, P., *op. cit.*, p. 46.
- (32) BUTEL, P., *op. cit.*, p. 95.
- (33) DARESTIE, A., *Traites et droits de douanes dans l'ancienne France*. Bibliothèque de l'école des chartes, 1847, t. 8, p. 465-478; MARION, M., *Dictionnaire des institutions de la France*, Paris, Picard, p. 539.
- (34) AD Herault, C 2875, Ordonnance du 9 septembre 1693; Ordonnance du 24 septembre 1693; Arrêt du Conseil du 23 mars 1694.
- (35) AD Herault, C 2875, Arrêt du Conseil du 10 novembre 1739; Déclaration du 13 juillet 1763; Édité de juillet 1764; Arrêt du Conseil du 13 septembre 1774.
- (36) AD Herault, C 2875, Ordonnance de l'intendant de Languedoc du 13 août 1698.
- (37) AD Herault, C 2875, Ordonnance de l'intendant de Languedoc du 14 mai 1701.
- (38) AD Herault, C 2875, Arrêt du Conseil du 14 août 1703.
- (39) FRÉCHE, G., *op. cit.*, p. 753.
- (40) ROMANO, R., *Commerce et Prix du Blé à Marseille au XVIII^e siècle*, Paris, Armand Colin, 1956, p. 32, 61-67, 134-135.
- (41) AD Herault, C 2875, Arrêt du Conseil du 29 août 1730.
- (42) AD Herault, C 2880, État des grains sortis de la province de Languedoc, 1732-1734.
- (43) 一七八九年九月十日國王顯聖宗義裁決ニヤル國王の權裁ナク外國
ノ商賣ヲ禁止スル事 AD Herault, C 2923, Arrêt du Conseil du 7 septem-
bre 1788; Correspondances, 1788.
- (44) AD Herault, C 2923, Sortie des grains par les ports de Languedoc, 1788.
- (45) ナルキニモビヤク小麥ノスチエチリニル (リニルニヤ) ○
ヤラトヤチニヤ三三三・五キログラム・イカニタル 五ノ六ノ
三キログラム) ニ取テラレ LARGUIER, G. (1999), p. 1174.
- (46) FRÉCHE, G., *op. cit.*, p. 787.
- (47) AD Herault, C 2913, État des négociants en bled en 1772.
- (48) *Ibid.*

(89) AM Narbonne, BB, t. II, le 28 mai 1750.

本研究はJSPS特別研究員奨励賞(18140131)の助成を受けたもので
ある。